

魔法の言葉 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 杉原大輔 所属：山口県立周南総合支援学校 記録日：2018年2月23日
キーワード： 実態把握、コミュニケーション指導、環境設定

【対象児の情報】

- ・学年 小学部4年
- ・障害名 知的障がいを伴う自閉症
- ・障害と困難の内容

強度行動障害があり、強い過敏がある。特に頭を壁やゆかに打ち付けたり膝で顔を蹴ったりする自傷は危険度が高いと思われる。保護者のご希望により膝周りにクッションをつけられる車いすを作成。学校では多くの時間車いすに乗ったまま生活を行っている。28年度は自傷などによる体調不良のため2度の入院、長期欠席があった。28年度は一日1時間程度の登校だった。29年度はじめも1時間程度の登校を行なっているが、欠席も多い。



対象児 T 君

【活動目的】

- ・当初のねらい
 - 1 SNSを使用して保護者と連携を取り、登校日を増やすとともに登校時間を長くすることができる。
 - 2 環境調整された静かな教室や特別教室の中で落ち着いて過ごすことができる。
 - 3 学校で受け入れられる活動を少しずつ増やし、興味のある活動が見つかるきっかけづくりをし、主体的にものや人とかかわろうとすることができる。
- ・実施期間
2017年4月～2018年2月
- ・実施者
杉原大輔
- ・実施者と対象児の関係
学級担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

H28 年 11 月に食事と水分をとれなくなり、自傷も強くなったため、入院。5日間入院生活の後、退院。通院をしながら、体調の回復に努めたが、H29 年 1 月以来登校できなかった。H28 年度 3 学期の出席日数は 5 日だった。H28 年度学校では、仕切られた畳スペースで 1 時間 DVD を見て過ごすことが主で、教員は過ごしている様子を見守るという状況であった。H29 年度も、4 月から同様の内容で DVD を見る活動で 1 日 1～2 時間程度の登校を行っているものの欠席が多く、家庭でもなかなか落ち着いて過ごすことができない様子もうかがわれた。また、図 1 に示したとおり、学校での約 1 時間の登校時には、自発的な働きかけはほとんどなかった。

＊5 月末時点での出席状況

出席 25 日

欠席 10 日

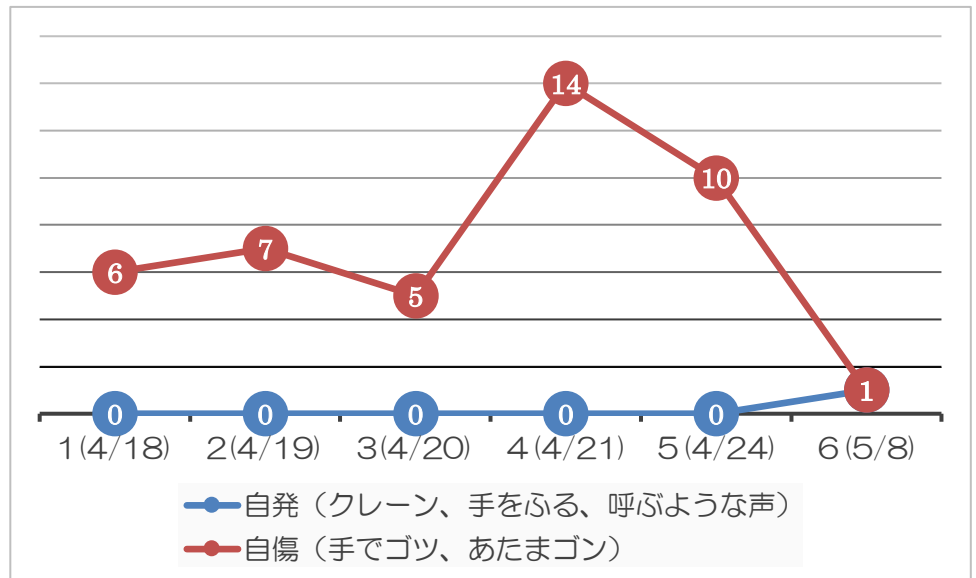


図 1：指導開始時の学校での自発・自傷の回数

○父母の 2 人体制で登校していただく日々が続いていたが、母のみ、父のみの送迎も可能になってきている。

○話し言葉の理解は難しい。写真カードをよく見るものの、どのくらい理解しているのかは不明である。

○音への過敏、人の多い空間への拒絶反応、移動することへの激しい抵抗などが見られる。

○コミュニケーションを自らとる様子は、ほぼ見られない（要求あるいは要求につながりそうなクレーン動作は、4 月から5月初めにかけては行動観察グラフにある通り、1 日約 90 分あたり 0 から 1 回であった。）

＊児童の実態のうち、特に顕著なもの

不安→登校時には、写真 1 のように毛布を頭の上に置いていて、人の接近により顔を覆う。また、車に乗るのを拒否する様子が見られるようになった。

コミュニケーション→意思を伝える手段がなく、自傷、他傷によって表現するしかない。



写真 1：毛布を被っている T くん

・活動の具体的内容

1 SNS を使用して保護者と連携を取り、登校日を増やすとともに登校時間を長くすることができる。

→LINE を使用して、保護者と朝の様子や休日の様子、睡眠、家庭で興味を持っていることなどについて密に連絡を取る。学校で活動している画像や動画も送付して様子を共有し、自傷が増えていないことを確認しながら登校時間を伸ばしていく。



2 環境調整された静かな教室や特別教室の中で落ち着いて過ごすことができる。

→一人の空間を作る、クッションや毛布、車いすなど本人が落ち着くために必要だと思われるものを保障し、穏やかに過ごすことができるようにする。第2 自立活動室（スヌーズレンの部屋）も活用し、静かな環境の中で過ごすことができるようにする。

3 学校で受け入れられる活動を少しずつ増やし、興味のある活動が見つかるきっかけづくりをし、主体的にものや人と関わろうとすることができる。

→FaceTime でグループ学習の教室の様子を見る時間を設ける。また、朝のあいさつに来た教員の手にタッチしたり、靴の履き替えに足を出して応じたりなど毎日の繰り返しの中で、やわらかく応じられる場面を設ける。 また、短い手遊び歌やスキンシップ遊びなども取り入れて様子を見る。

→少し離れた位置で児童の視界に自然に入るようにおもちゃや飲み物、食べ物を持参して様子を見る。

<その他>

*記録ツールとしての ICT 活用アプリ「DropTalk」・「生活スタンプ」 (T 君の行動の傾向をつかむ)



目視での観察に加えて、行動を客観的に把握するために6月から「DropTalk」のログ機能を使い記録を取った。iPhone を携帯しておき、行動が起きるたびに図2に示した画面の該当するボタンをタップする。記録用紙での記録では間に合わないような連続した動きでも記録しておくことが可能。また、ログは CSV 形式で書き出すことが可能であり、Numbers や Excel を使って詳細な分析ができる。（「DropTalk」、「生活スタンプ」共に、Numbers との相性が良い。Excel だとデータ転送時に文字化けする）

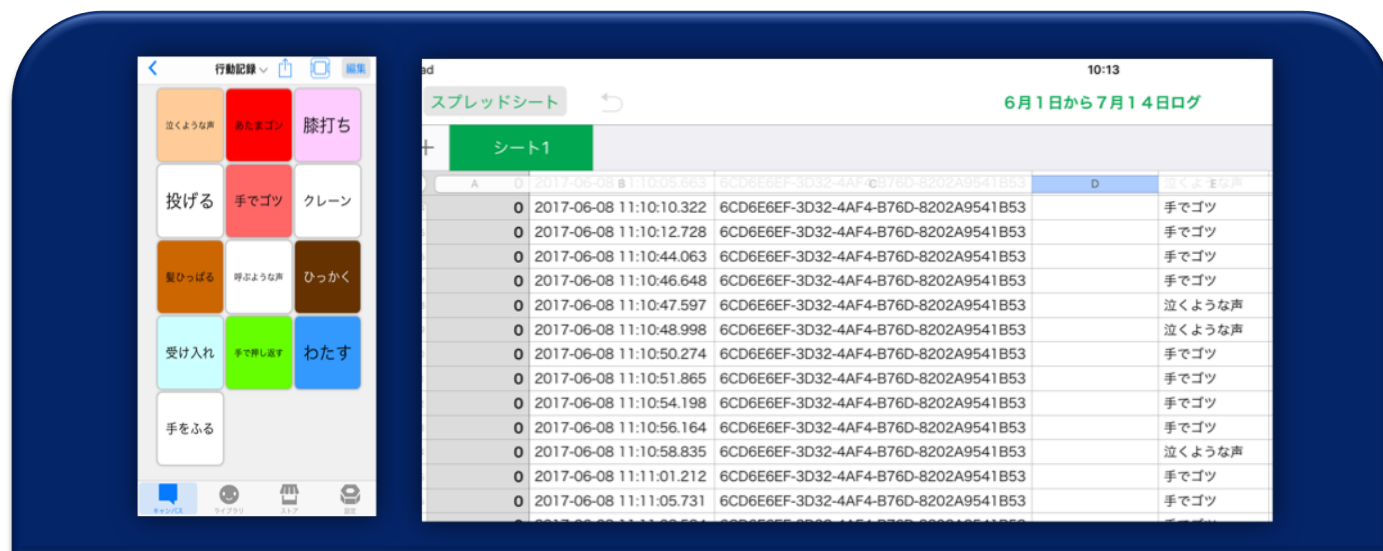


図2：DropTalk のタップ画面と CSV 書き出しの一例

○タブレット記録のメリット

- ① タップするだけでいいので、頻繁に行動が起きるお子さんの記録を確実に取ることができる。
- ② 時間も同時に記録してくれるので、週予定表からどのような活動をしていた時かを把握できる。

○タブレット記録のデメリット

- ① 行動の直前直後にどのようなことがあったのかが、わからない。
- ② 詳しい記録を取ることは難しい。

→デメリットへの対応のために、2学期以降は、図3に示したように、アプリ「生活スタンプ」のコメント欄に大きな自傷「あたまゴン」の前にどのようなことがあったのかを記述し、情報を蓄積していく。

→蓄積したデータを毎月の学部会で報告し、T君の様子について学部全体で共有していく。

*夏休み登校日の設定

夏休み中に通常の登校日よりも多く（5回）設け、継続的に児童の様子が把握できるようにする。登校時間の長さも通常通りとする。

担任不在時には、他の教員に支援に入ってもらい、T君の様子を共有する。

図3：「生活スタンプ」のコメント機能

・対象児の事後の変化

1 出席日数、登校時間の増加・LINEによる夏休みの宿題への取り組み

2学期以降は発熱による欠席が1日、担任出張による登校の見合わせが2日あった以外は、毎日出席することができた。睡眠食事のリズムが崩れて調子を落としていた9月も、毎日登校することができた。また、3学期は皆勤である（図4）。

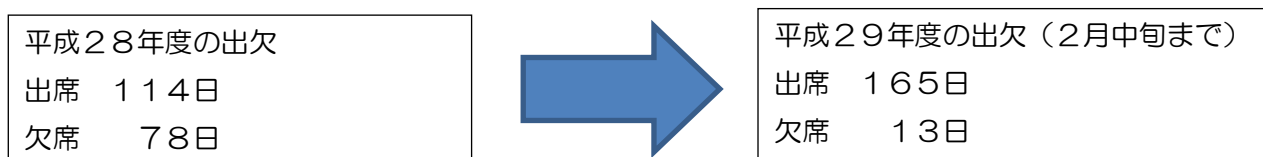


図4：28・29年度の出欠数の比較

さらに学校での様子と家庭での様子を連絡帳とLINEで共有しながら、下の図5に示したとおり少しずつ登校時間を長くしていった。6月末からは他の児童と同じ通常の登校時間で登校することができるようになった。行事の日も含めてほぼ毎日3学期まで通常登校することができた。

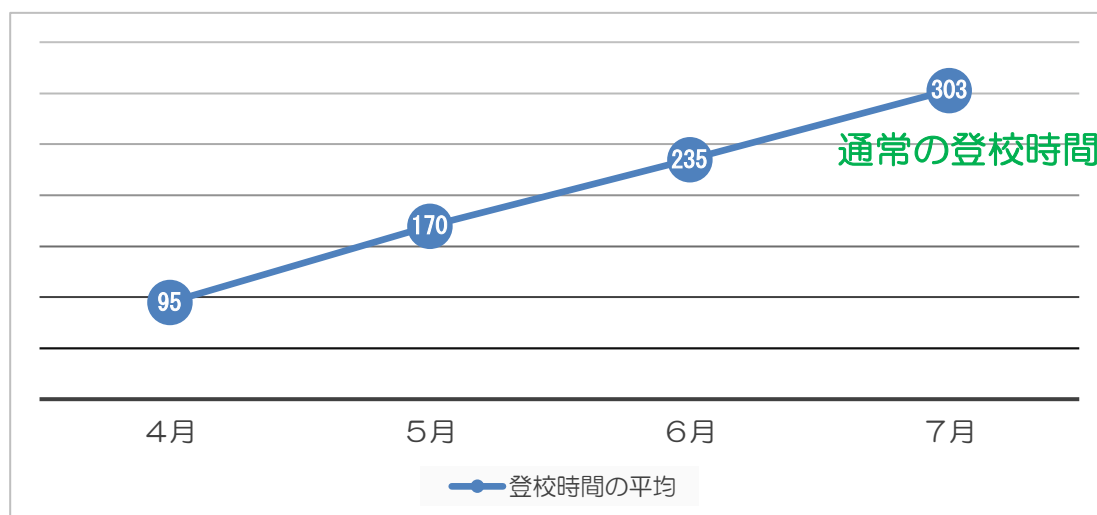


図5：4月からの登校時間の平均（分）

登校時間を長くできた要因としては、昨年度との違いから以下のように考えた。

- ① 車いすに座ること、毛布をかぶることを保障し、いつでもＴくんの安心ステーションを確保できた。
- ② 教室だけでなく光の部屋での活動も保障し、校内に安心できる複数の場所ができ、Ｔくんが過ごすことができた。
- ③ 保護者の意見や何気ない気づきを共有できるように、アナログデジタル両方の手段でＴくんについてのやりとりを行なったことで、保護者の希望を聞きながら段階的に時間を長くすることができた。

LINE に関しては、連絡帳ではやり取りが難しいお家でのＴ君の様子を図６のように画像で送っていただくことができ、教室環境を整える際にとっても参考になった（図６）。また、徐々に登校時間を長くして行く際には、学校での様子を即お知らせして、無理なく時間延長ができた（図７）。



図６：LINE による家庭との情報共有

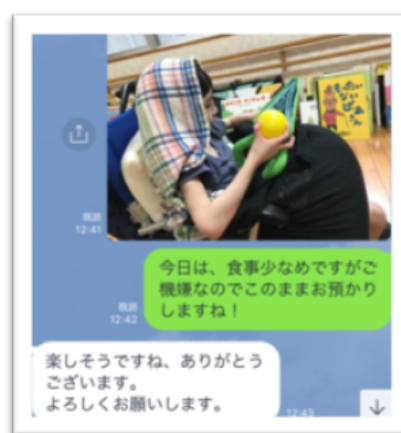


図７：LINE による登校時間調整

さらに、LINE を使った夏休みの宿題（夏休み中に１枚思い出写真を送付していただくように依頼）をお願いしたところ、初日にすぐメッセージつきの写真が送られてきた。車中から学校の夏祭りに初めて参加できたという内容であった。その後も児童の様子が安定していた８月前半まで、様々な場所への出かけ写真を７枚送っていただいた（図８）。



図８：LINE による夏休みの宿題

2 教室や特別教室で安心して過ごすことができる場面の増加

学級には3名在籍しているが、教室を2室確保することができたため、1室をTくん専用の教室として環境調整を行い、生活を行った。毎日登校後には、車いすのままで生活スペースに行き、視覚、聴覚的な刺激の少ない場所で過ごすようにした（図9）。



リラックススペース



遠隔朝の会スペース



生活スペース

図9：教室の環境調整



FaceTime による通信朝の会



イラストカードを持って過ごす



教員が教室に来てタッチ



光の部屋で過ごす

図10：刺激やかかわりを「受け入れ」る活動のようす

1学期は、環境調整を行なったのち、見る刺激を受け入れたり人とタッチしたりする活動を少しずつ行っていた（図10）。人とタッチをする活動は、担任やクラスの教員を中心に行い、毛布を少し上げてタッチをする様子が見られるようになった。

FaceTime による朝の会は何度か活動して行くうちに iPad を手で押し返す仕草が見られるようになったため、6月後半からは行っていない。また、音の出る絵本やプットイン教材は拒否する様子が見られたものの、光のおもちゃ（音のしないプッシュライト）は、教員が見せると手を伸ばして受け取る様子が見られた。このため、毎日4校時に第2自立活動室（スヌーズレンの部屋）で過ごすようにした。

第2自立活動室では、自傷が出ることも少なく、T君にとっての安心できる場所が一つ増えた。

2学期に調子が崩れた際には、保護者から家庭では窓から外の景色を眺めて落ち着いていることが多いという情報をいただき、下の図11のように児童が主に過ごすスペースを窓際に変更したり、図12のようにプッシュライト式のスケジュールを導入したりした。2学期は食事や睡眠の不安定さもあり自発的な姿はあまり見られなかったが、大事そうにプッシュライト式スケジュールを持って教室の生活スペースで落ち着いて過ごす様子が見られた。

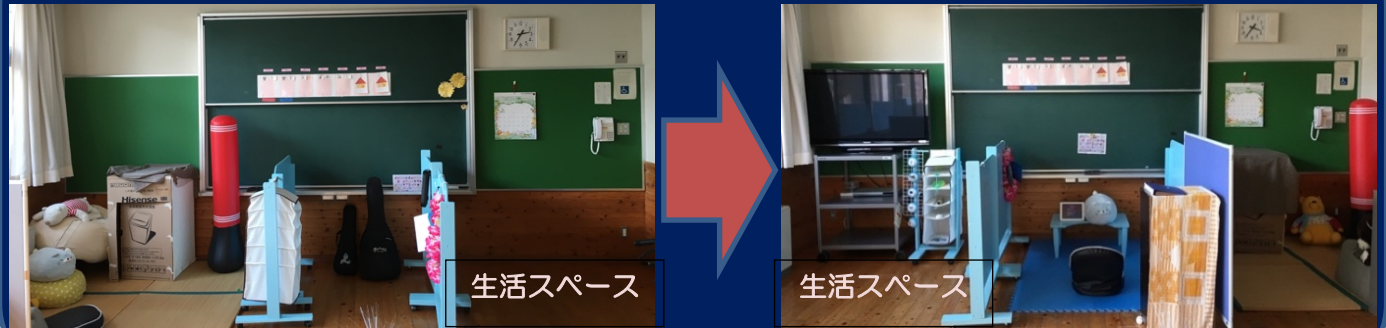


図11 教室の環境再調整で生活スペースを窓際に（2学期）

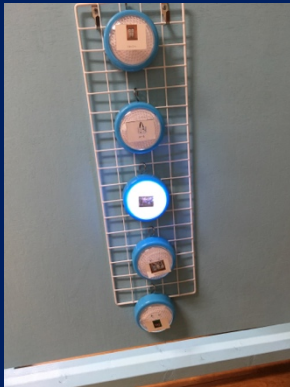


図12 プッシュライト式スケジュールを使用している様子

3 学校でできる活動の増加

保護者から歩行の時間を確保してほしいとの要望があり、6月初めより登下校の自家用車から車いすへの移動は歩くことにした。車いすが学校の安心アイテムと感じている様子のTくんは、片手を軽い力で援助すると初日から小走りで車いすに行き、座ることができた。機嫌が悪いと感じられる日でも、毎日歩くことができた。本人が理解して動ける活動として定着した。

登校時の歩行が定着してきた6月後半と7月は、図13で示したとおり大きな自傷の膝打ち（膝頭で顔を蹴る）・頭ゴン（頭を柱や壁に打ち付ける）がほとんど見られなかった。

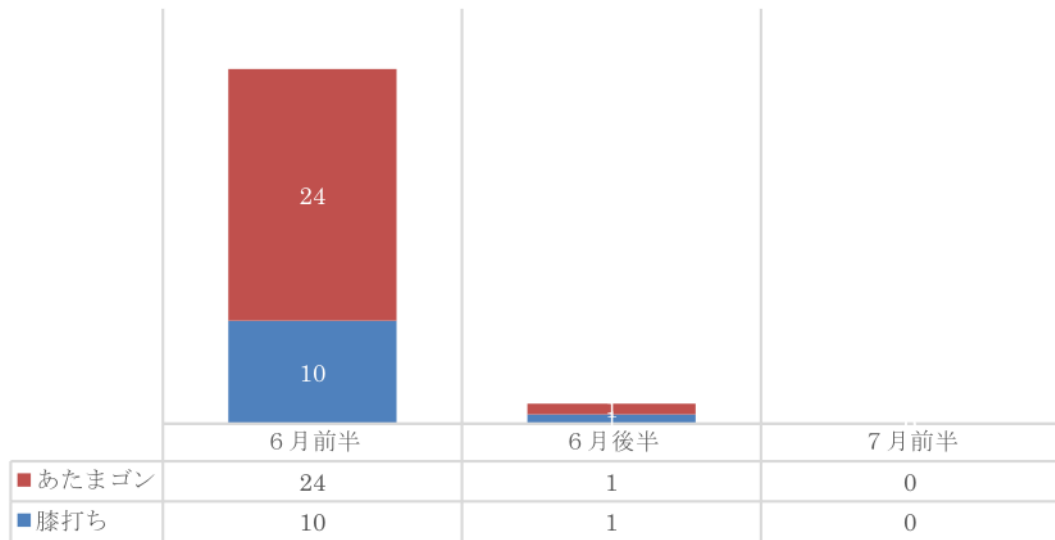


図 1 3 6月から7月までの大きな自傷回数の変化

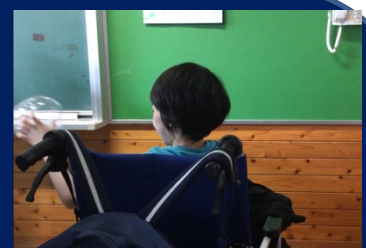
このため、登下校の歩行（車から車椅子まで）をきっかけとして6月以降、図 1 4のように無理なく学校での活動のバリエーションを増やしていくことができた。



登校時の歩行



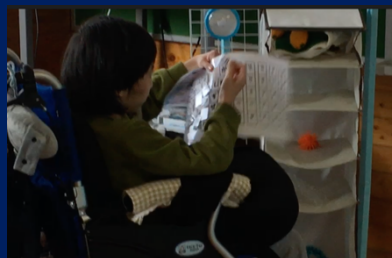
校舎内車いす探検



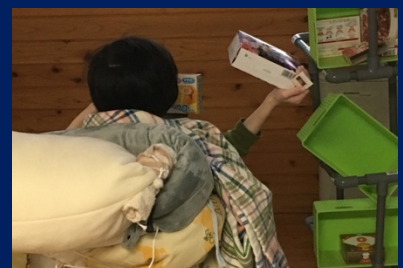
プラバールン遊び



トンネルくぐり



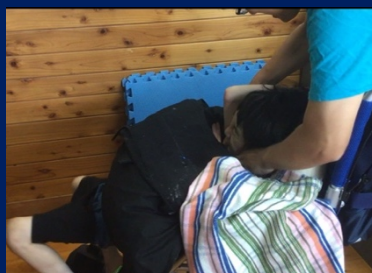
カード遊び



ボックス遊び



温水プール活動



くすぐり遊び



教員を回転させて遊ぶ

図 1 4 6月以降に増えた活動の例

特に7月から開始した温水プール活動は年間を通して19回入水することができ、継続して取り組むことができた。担任の教員を目指して歩いたり、浮き輪をつけて自分で動いたりする様子が見られた。

また、機嫌が良好な日が多かった6月後半には、自ら教員の手を取って車いすを動かしてほしいと要求する姿が見られるようになったため、「ドライブタイム」として校舎内をグルグル何周も回る活動を取り入れた。「ドライブタイム」を行なっている時には自傷が少なかった。別の場所に行くことを要求するクレーン動作だけでなく、担任や近くにいる教員に自ら手をふる動きも見られた。

コミュニケーションの活動として、本人の様子を見ながら少しずつおもちゃや身体接触による遊びにチャレンジしていった。くすぐり遊びでは、教員の顔を見ながらキャンディのおもちゃやマットを投げて笑うようすもみられた。

そのほか、様々な素材に触れる活動にも取り組み、好きなもの記録シートに記録していった。表1に示したとおりであるが、自傷が多い時期には手を伸ばしていた教材でも拒否を示すことがあった。

表1 教材提示時の反応

	反応なし	拒否	手を伸ばす	笑顔	取られると抗議
提示したもの	シャボン玉 ぬいぐるみ	絵本 音絵本 キーボード ギター プットイン教材 DVD＜動画＞ (4、5月は拒否なし) プラレール iPad＜中継＞ (4、5月は拒否なし) 皿回し	ラミネート絵カード プッシュライト (手のひらで握りしめられるサイズ) 布おもちゃ (小)(6月後半のみ) 商品パッケージの箱	チカバルーン (6月後半のみ) 風船(6月後半のみ) ボンボン	毛布(決まったもの) 車いすの足用クッション

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

コンディションが良くなかった(睡眠時間が減少した、毛布をかぶっていることが多かった)5月、9月後半はかかわりを減らし、上向いてきたときに、Tくんの振りむきやクレーン動作のタイミングに合わせてかかわった。このことでTくんがかかわりを受け止められる場面が増えたと感じる。ICTを使って行動の記録を確実に取り、保護者と家庭での様子を日々やり取りすることができたことで、教員の適切なタイミングによる適切な量での関わりにつながり、Tくんの自発的な行動が増え、自傷の減少につながったのではないかと。

・エビデンス（具体的数値など）

① 日々の記録の意味

日々の記録をICTを使って収集したことで行動記録の取りこぼしなくなり、「自発がある時」に関わり、「自発がない時」には関わりを「靴の脱ぎ履き」「下校を伝える」などの必要最小限にとどめること、そして小さな自傷の際には、収まるまで待つことで対象児が頭を連続で床や壁に打ち付ける「あたまゴン」へつながること少なくし、連続して登校することができたと考えている（図15）。特に睡眠、食事のリズムが崩れていた（図16）9月後半に関わりの量を最小限にとどめた（図17）ことで、小さな自傷の回数が増加した時でも、大きな自傷に繋がらず、登校を続けることができたと考えている。なお、11月には大きな自傷が増えていたが、これは、文化祭の前で練習をする音という環境調整では工夫が難しい音が教室まで聞こえてしまっていたためだと考えている。

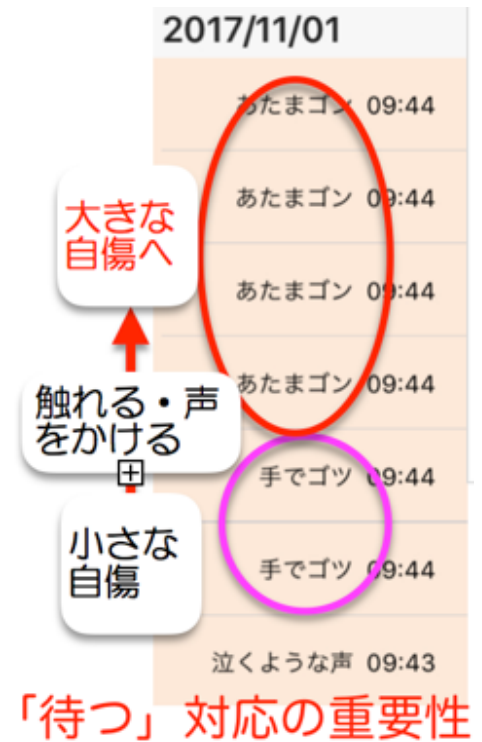


図15 大きな自傷につながる流れ

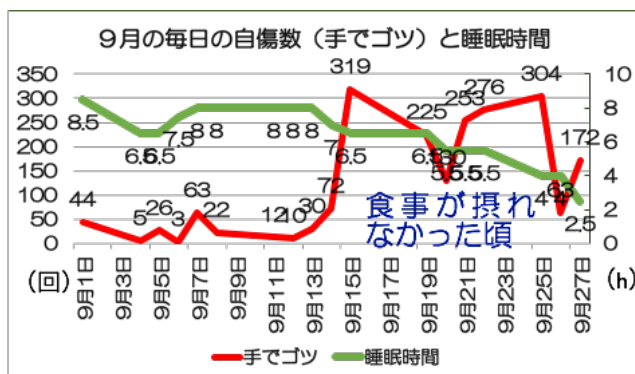


図16 9月の自傷と睡眠時間

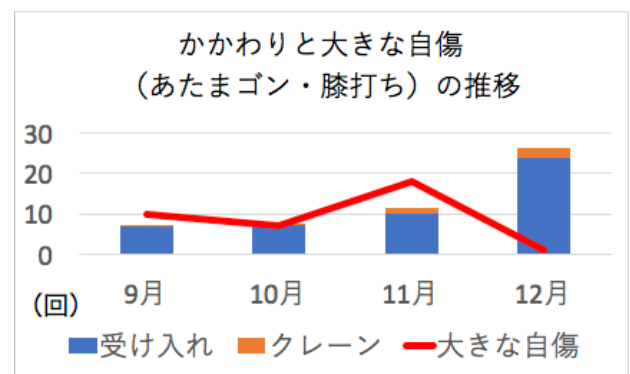


図17 9月～12月までのかかわりと自傷の推移（1日あたりの平均）

② 自発的な行動と自傷の関係性

3学期に入り、1月中盤から後ろにいる教員の方を振り向いて「手をふる」動作や、「呼ぶような声」を発する場面が増えた。教員はTくんの「手をふる」行動には手をふりかえし、「呼ぶような声」には発音やイントネーションをそのまま真似て繰り返すようにした。自発と応答を続けていくことで自発的な働きかけは増え、自傷が減る傾向が見られた（図18）。グラフが示している通り6月後半と1月後半がTくんにとって関わりたいタイミングであったことがうかがわれる。

また、9月後半以降は、自発もほとんどなく、自傷の数も1日100回以上で推移していたことからわかるように、Tくんにとっては、あまり関わってほしくない時期であったと言えるのではないかと考えている。関わるべきタイミング・時期を的確に把握していくことが今後も重要だと感じている。

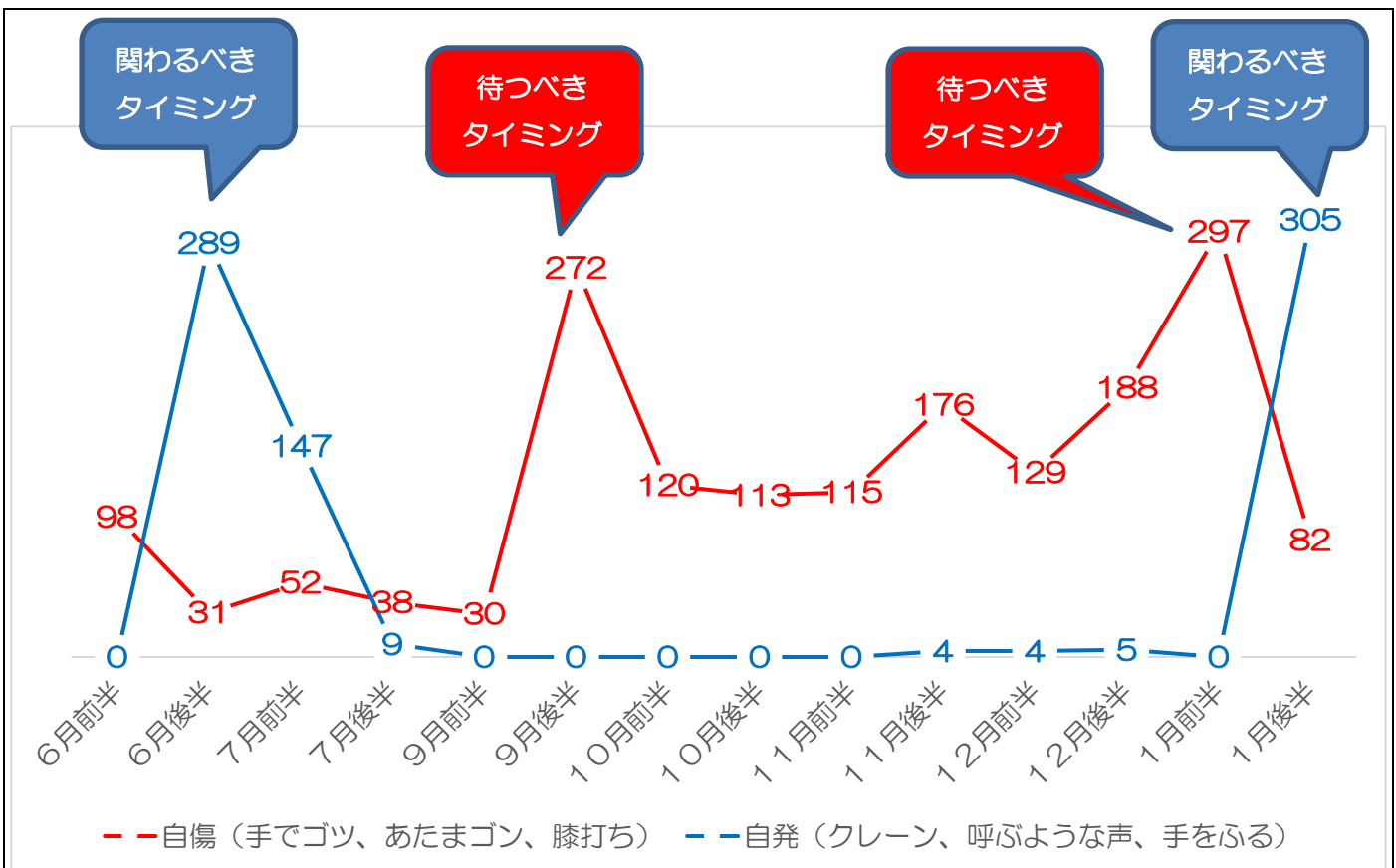


図18 1日あたりの自発数と自傷数の推移

③ 自発的な発声バリエーションの増加

1学期に見られた泣くような（不機嫌そうな）声以外の自発的な発声は、「たあちゃん」という一言だけであった。また、コンディションが整いにくかった2学期には自発的な発声は見られなかった。それが1月になって、久しぶりに担任の方を振り向いて、「たあちゃん」と言う姿が見られるようになった。また、下の表2に示した通り、発声のバリエーションも増えた。

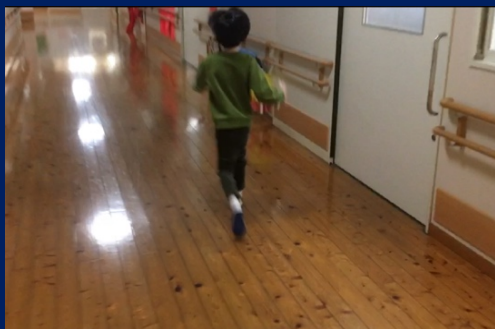
表2 教員を向いての自発発声のバリエーションの変化

1学期	2学期	3学期
たあちゃん	なし	たあちゃん、ぱんわ、はーちゃん、てん、ぱん、あちゃ、てんて、はうかちゃ、まんま

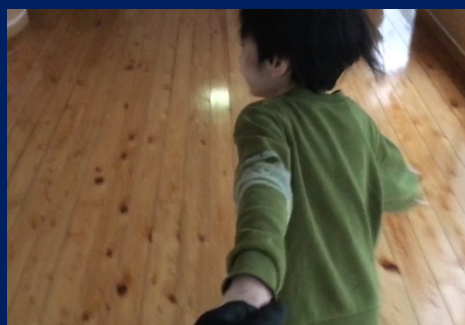
・その他エピソード（画像などを含めて）

1 一人歩き

3学期に入って、車いすをおろしてほしいと教員の手をベルトに持っていく姿が見られたため、車いすからおろしてみると、自分一人で歩いてエレベーターに向かう姿が見られるようになった。これは、ほぼ2年ぶりのことであった。一人で行きたい場所に行くという強い意志を感じる出来事であり、関わる教員もとても驚いた行動だった。時折後ろを振り返り教員の手を引いて歩く姿も見られた。2階の保健室と3階の会議室に必ず入る姿が見られた。



保健室に一人で向かう



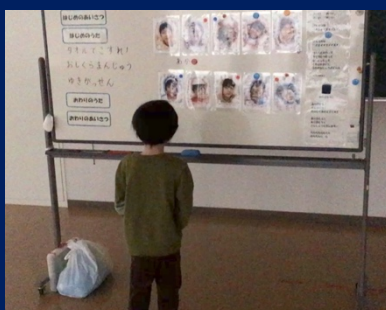
教員の手を引いて歩く



会議室のドアを開けて入る



消火器を取ろうとする



クラスの友達の写真を見つけて立ち止まる

図19 一人歩きの様子

歩いて校舎内を探検していた際に会議室を周った際、ホワイトボードに同じクラスの子もたちの写真が貼られているのを見つけると、しばらくじっと見つめる様子が見られた。自分で歩くことで初めて教員に見せてくれた姿であった（図19）。

2 家庭での変化

2月になって連絡帳に「家で母親に頭をなでてほしいというクレーンでの要求が出てびっくりしました」との記述があった。

今後の見通し

図20に青色で示したように、今年度の実践でかなえられたのは、主に土台となる安心の部分である。今後は次に示す1から3までの流れで、土台となる安心の部分の強固にしながら、興味のあるものをモチベーションにしてコミュニケーションをT君本人発信で取れるようにしていく必要があると考えている。

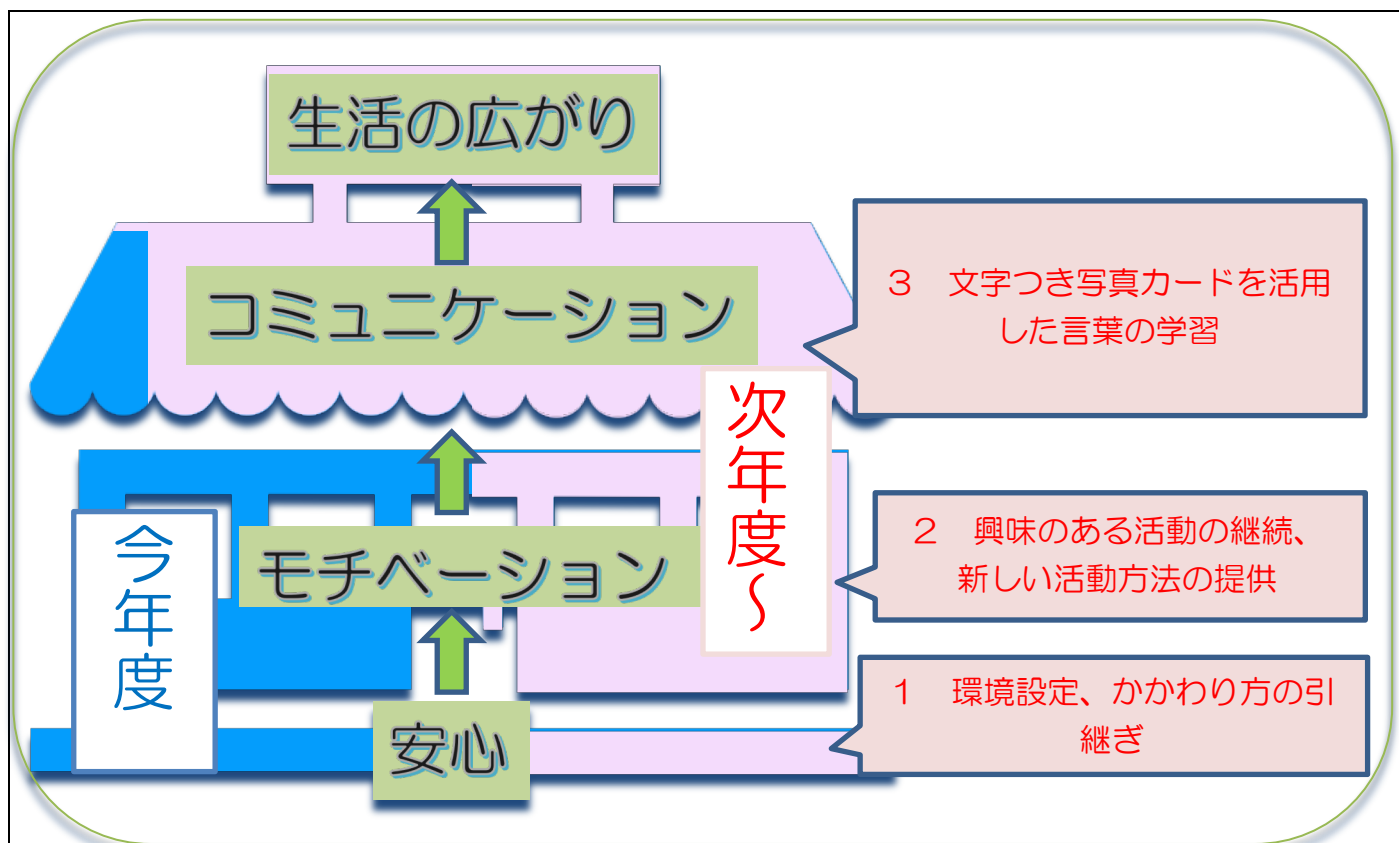


図20 生活の広がりをはたせるイメージ図



PowerPoint

1 環境設定、かかわり方の引継ぎ

毎月の学部会で行った情報共有の書類をもとに、アナログでの引継書として、1日の支援手順を引き継ぐ「僕の言葉わかってカード」(図21)と、T君が混乱した時の対応を示した混乱時対応手順書を作成する。また、PowerPointを使用して、T君のコミュニケーションや、調子が良い時・悪い時の様子、活動に取り組んでいる様子、教室環境などを動画で見られるようにデジタル引継書を作成する(図22)。

Kくん1日の流れ支援表			
時間	活動	手順	気をつけたい事
事前の準備	車いすを玄関に	本人の靴箱の前に車いすを置いておく。	他の児童の登校と重なるため、他児童生徒の登校のさまたげにならない場所におく。
8:30~9:00	登校	<車中で> ☐ 靴下を履く ☐ 靴を履く ☐ 膝クッションを外す ☐ シートの肩ベルトを外す ☐ 「行くよ」と言いながら、本人の両手を持って車から下りる。 ☐ 片手を引くと自分で玄関まで歩いて車いすに乗ることが出来る。 ☐ 車いすの膝クッションをつける	*笑顔で「おはよう」と語りかける。 *靴下、靴を本人に見せてから、履かせるようにする。 <足を上げて協力できることが多いので5秒程度待つ> *髪を引っ張ることがあるので、少し離れ気味から関わる。 髪を引っ張られても声を出さず反応しないようにする

図21 僕の言葉わかってカード

2 コミュニケーションのタイミング

1 毛布をかぶっている時

コミュニケーションを求めているので、静かな環境を心がける



クリックすると、様子が動画再生される。

図22 デジタル引継書

2 興味のある活動の継続および新しい活動の提供

温水プール活動や光遊び、商品パッケージ遊びなど今年度好んでいた活動については対象児の様子を見ながら継続していく。そのほかボール遊びやエアポリンなどの粗大運動を取り入れるなど、教材・活

動のバリエーションを増やしていく。さらに、一人で過ごす教室に友達が訪問してきたり、集団学習の場面を見学に行ったりなど無理なく人を感じられるような状況を設定していく。

3 文字つき写真カードを活用した言葉の学習

今年度1月になって帰宅したいと伝えるために、スケジュールボードに貼られた「くつ」カード（図23）を取って欲しいとクレーン動作で要求する姿が2度見られた。今後はスケジュールを理解するための提示だけではなく、T君が興味のあるものを中心に文字とセットになった写真カードを作成し、コミュニケーションブックを作成して蓄積していくと良いのではないかと感じた。言葉とカード、実物と見比べながらカードの役割を理解し、自らコミュニケーションに使えるツールとなるように場面設定を工夫していきたい。また、家庭と現在の学習状況について連携しながら取り組むことは引き続き重要であると考えている。

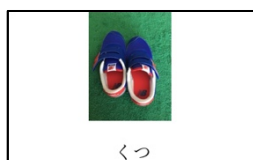


図23 スケジュールカードの一例